

水の学校

5年間のあゆみ

武蔵野市水環境講座
報告書



2019(平成31)年3月
武蔵野市環境部下水道課

はじめに

「水の学校」は武蔵野市の市民参加型の水環境啓発講座として2014年度にスタートしました。この「5年間のあゆみ」は、市の担当職員と企画運営のアドバイスを行うNPO、そして参加者・支援者であり活動の主体でもある市民がどのように講座を組み立ててきたのか、開始から5年間の節目に振り返ってまとめたものです。各年度の活動内容に加え、事業にかかわったメンバーの率直なコメントや重要と思われるポイントを数多く紹介しています。また、「水の学校」全体を通して特徴的と思われる取り組みについては、「コラム」の形で取り上げています。今後、水循環・水環境に関わる業務や活動に携わる方、また水に限らずさまざまなテーマで市民参加型のプログラムを企画・実施する方にご活用いただければ幸いです。

目次

はじめに	2
「水の学校5年間のあゆみ」編集にあたって 武蔵野市長 松下玲子	3
「水の学校」5年間を振り返って 「水の学校」名誉校長 橋本淳司	3
「水の学校」の経緯と特色	4
「水の学校」のあゆみ	6
「水の学校」事務局のある1年	8
2014年度の活動	10
コラム1 「水の学校」の送り手たち	13
2015年度の活動	14
コラム2 講座ができるまで	19
2016年度の活動	20
コラム3 ニュースレターとは?	25
2017年度の活動	26
コラム4 サポーターミーティングとは?	31
2018年度の活動	32
コラム5 ステップアップ講座とは?	37
つなぐこと、続けること～「水の学校」の立ち上げから5カ年を経て NPO法人雨水市民の会 笹川みちる	38
おわりに	40
報告書の発行にあたって	42



「水の学校 5 年間のあゆみ」編集にあたって

武蔵野市長 松下玲子

武蔵野市を含めた市街地では、都市化が進展したためにおこる雨水の流出を抑制するため、各地で雨水浸透施設等を設置する取り組みが行われていますが、いまだに多くの雨水が下水道管に流れ込んでいて、地面に浸み込むなど、本来流域が有していた水循環系のバランスが崩れつつあります。更に短時間に集中するゲリラ豪雨の頻度も高まっている中で、都市型水害から市民生活の安全を確保するためにも、水循環系の改善が望まれています。

「水の学校」は、平成26年度に開校して平成30年度で5年の節目となりました。わたしたち人間の身体は、体重の6割から8割が水だと言われています。そのほか生活のたくさんの場面で水は関わってきていますが、その水をもどくように使うか、どこから来てどこに行く水なのか、普段

の生活の中で意識する機会はないという人も多いと思います。この5年間で修了生は161名となり、「水の学校」の講座やイベントの企画・運営に参加していただいているサポーター登録者は現在までに76名となりました。市と連携した活動のほか、自主的な活動を行ったり、サポーターにならなくても地域で活動している方々も含め、様々な形で水への関心、意識をもった方が市内に広がっています。

昨年も、豪雨等の自然災害が日本各地で頻発し、甚大な被害をもたらしています。天の恵みである雨水をどのように有効利用し、また、自然にどのように戻していったらいいか、改めて一人ひとりが考えて行動しなければなりません。これからも市と市民が連携し、水循環・水環境の課題を共有し、解決に向けた取り組みを進めていきましょう。

「水の学校」5年間を振り返って

「水の学校」名誉校長 橋本淳司（水ジャーナリスト・アクアスフィア水教育研究所プロデューサー）



武蔵野市の「水の学校」に5年間携わらせていただいたことは、私にとって貴重で楽しい経験でした。「水の学校」を通じて出会い、いっしょに水のことを学んだ参加者のみなさん、市長さん、市役所の皆様、関係者の皆様に感謝を申し上げます。

「水の学校」の特長は3つあります。1つ目は、水の現場に実際に足を運び、五感で感じる。2つ目は、少人数で語らいながら学びを深めること。水といってもいろいろです。蛇口から出る水道水、ペットボトル水、雨水など。普段は目に見えない地下水の流れ、上下水道の流れ。さらには食べものや衣類など製品に変身している水。それらをどのように使い、どのように感じているかは人それぞれです。あって当たり前と思うのか、ありがたいと感じるか、あるいは脅威を感じるのかも、時と場合によって違いま

す。振り返って見ると、この5年間は豪雨災害や渇水、地下水の減少など、さまざまな水の出来事もありました。そうしたなかで参加者が身近な水辺や水施設に出かけ、語り合うことで、水に対する多様な価値観に気づき、共有するというのはとてもすばらしいことでした。

そして「水の学校」の3つ目の特長は、修了生がサポーターとなって、次年度の学びを手伝ったり、自主企画を立ち上げていることです。気づいた人が伝える人になり、次の気づきを生んでいくサイクルが育まれつつあります。自治体の教育事業の成果は評価が難しいのですが、「水の学校」は修了生の今後の活動こそが、本当の意味での成果になっていくのだろうと期待しています。

水の学校 の経緯と特色

武蔵野市水環境連続講座「水の学校」とは

「水の学校」は、市民のみなさんと一緒に水を知り考えるシリーズ講座です。くらしの中の身近な水循環、上下水道の役割や、水に親しみ水を楽しむ知恵、そして世界規模の水課題、地球規模の水循環・水環境まで、水を取りまくさまざまなテーマを取りあげ楽しみながら学ぶこと、そして受講生同士が仲間となり、地域での自発的な行動が広がることを目指しています。

「講座が楽しい」を一番大切にする

楽しければ「もっと知りたい」「他の人に伝えたい」気持ちが湧いてきます。

一面からではなく、多面的な切り口から学ぶ

使う水がどこから来て、どこへ行くのか。くらしと水にはどんな関わりがあるのか。一連の水循環を学ぶことで、水環境の保全の重要性、そのために下水道の果たす役割に自然に気づくことを目指します。

現場の見学・体験と参加型ワークショップのセット

受講生同士がコミュニケーションをとり、発言して意見を共有します。見て聞くだけで終わらない講座です。

講座修了後の活躍の場

修了生による「水の学校サポーター」制度を設けました。サポーターは「水の学校」の企画運営に参加し、自由に情報交換や交流を行うことで自身のスキルアップを図りながら、さらに広く市民へ気づきを伝えていくことができます。

「水の学校」が生まれた背景

武蔵野市にはさまざまな水環境の課題があります。主な課題としては、集中豪雨時に発生する浸水被害対策や、耐用年数を迎えた下水道管等設備に係る更新費用をはじめ、身近な水辺の創出、湧水の復活などが挙げられます。

これらの多様化した課題を解決するためには、公共用地での対策のほか、各家庭での雨水浸透ます・雨水貯留タンクの設置や下水道使用料の適正化など、市民の理解と協力が欠かせません。

課題を市民と共有し、行動につなげるため、従来の啓発事業を革新したのが「水の学校」です。

企画実施におけるNPO法人雨水市民の会との連携と活動の担い手づくり

「水の学校」は、市のみの力によって立ち上がったわけではありません。従来の市による啓発手法は、市から市民への一方通行で市民は受け身にならざるを得ませんでした。そのような問題を抱えている中、下水道広報関係者や雨水事業関係者などとの出会いがあり、市で行う啓発活動のヒントを得ました。そこで紹介されたのがNPO法人雨水市民の会です。水循環に関する一般向けの啓発経験の豊富な団体に「水の学校」の企画運営を委託することで、効果的な啓発を行いつつ、5年間かけて市職員や講座を受講した市民にもノウハウを蓄積し、市民が自発的に活動を担うことができるようにする計画としました。

サポーターの中には、企業や地域社会の一線で活躍している方も多く、市職員とは違った視点で活動に取り組む方もいます。市民とともに担うことで、武蔵野市の水循環や水環境保全の啓発に厚みが生まれています。



より幅広い層をターゲットとした広報

受講生の募集についても工夫しています。水循環に限らず、環境に配慮した取り組みはみなさんの行動の積み重ねが大きな力となります。ところが、これまでの下水道関連のイベント参加者は、もともと環境問題に関心の高い層に偏る傾向がありました。市民がより幅広く参加するためにどんな工夫が必要かを議論し、様々な取り組みをしています。

表現のわかりやすさを重視

環境問題や下水道に対して興味がないという方にも身近な内容だと感じてもらうため、専門用語をできるだけ使わない表現を心がけました。

親しみやすいデザイン

パンフレットやポスターは思わず手に取ってみたいくなるようなデザインを目指しています。雨粒をモチーフとしたキャラクターやイラストなど、プロのイラストレーターやデザイナーが作成しています。

地域での幅広い活躍を期待

連続講座の対象は15歳以上の市民（在学、在勤を含む）としています。また、開催は全て土曜日とすることで平日は仕事・通学をしている方も参加しやすくなっています。武蔵野市内には、大きな川がない、すり鉢状のくぼ地がある、下水の処理場を持たない、水道は独自に事業を行っているなど、近隣他市と異なる特徴もあります。受講生が「どこかの」ではなく「私の」水として取り組めるよう、大きな水循環をとらえつつも武蔵野市の事情を踏まえた講座とし、修了後の地域での活躍を期待しています。

無作為抽出方式

多くの方に確実に情報を届けるため、市報やホームページでの広報のほか、参加条件を満たす市民1,000人を無作為に抽出し、直接講座の案内を発送しました（2018年度は2,000人へ発送）。これをきっかけに講座へ参加し、さらに修了後に活動している方も多く、効果の上がった方法の一つです。

連続講座以外の幅広い啓発

連続講座に参加できない方にも「水の学校」の取り組みを知っていただく事業も行っています。サポーターと市が一緒になり、親子でも楽しめるイベントをはじめ、一般向けのイベントや講座・見学会を実施したり、「水の学校」の内容や水にまつわる豆知識をお知らせするニュースレターを発行したり、「水の学校」フェイスブックや市公式ウェブサイトの運営を行うことなどにより、多くの方の目に留まる「気になる」啓発を目指しています。



他部署や外部機関との連携～下水道課が事務局となっている理由～

市民生活に下水道施設は欠かせないものですが、大部分の施設は地下にあり直接見る機会ほとんどなく、「下水道の見える化」は全国的なテーマとなっています。一方、下水道の現状だけを学んでも、その大切さに気づくには不十分であると言えます。地球全体の水循環における下水道の位置づけを伝えることで、初めて「なくてはならないもの」として自ら気づく機会になります。

しかし、下水道課だけでは以上の内容を十分に網羅する講座をつくることはできません。「水の学校」が始まる以前は、市の各部署が各々の視点で個別に環境啓発事業を行っていましたが、水のテーマは様々な分野に共通しており、連携した講座ができるはずだという考えに基づき、事業の骨格を組み立てました。

水の循環の大きな流れを学ぶ、一連の講座の構想を具体化するにあたっては、お互いに「水の学校」の趣旨を共有し、それぞれの機関・部署にとっても利点のある事業となるよう、広い視野をもって話し合いを重ね事業をつくりあげてきました。

2013年度

8月、概算予算要求。下水道や雨水利活用、水循環について総合的に学ぶ参加体験型の講座として計画しました。当初案から講座数や対象者数、連続講座かどうか、修了生が参加できる制度など全体の構成を何度も練り直し、ようやく実施のための予算を確保することができました。その際の目標として、5年の間に講座を受講した市民が徐々に自発的な活動を行い、啓発で担う役割を増やすことを目指しました。

2014年度

7月12日、「水の学校」が開校しました。全6～7回の連続講座のスタイルはその後5年間のベースとなりました。広く講座の存在を知ってもらうため、関係団体や地域の大学等へポスターやチラシの設置依頼をしたりFacebookページを立ち上げるなど、初年度ならではの営業の大変さがありました。一方で、当時のスタッフ用進行表はシンプルで、イベントに慣れたプロが進行するのに必要十分なものでした。修了生へのアンケート結果を次年度の運営に活かすしくみも初年度から取り入れています。

「水の学校」開校！

水の学校ニュースレター発行開始

「Oh!水 むさしのの水のものがたり」発行

「水の学校」サポーター誕生！

第8回国土交通大臣賞
「循環のみち下水道賞」受賞

2015年度

連続講座のほか、すそ野を広げるイベントを多く実施しました。昨年度の連続講座修了生の有志は「水の学校サポーター」となり、運営に関わるようになりました。サポーター間での情報共有のためのメーリングリストを開設し、ミーティングを開催しアイデアを出し交流を深めました。また、市の担当者対話しながら知識を深めることのできるステップアップ講座を開催し、その後の有志活動の卵ができた年でした。

「水の学校紹介パネル」作成

2016年度

NPO法人雨水市民の会から市職員、サポーターへ実施スタッフの移行を始めた年でした。4月に市の担当職員は総異動し「なぜ下水道課が水の学校をやるのか？」を問い直し、今後の人事異動に対応した事業継続のために制度面を整理する中で、職員研修や要綱制定も行いました。また、「ねらい」を共有し職員ごとの細かな進行表を作成するようになりました。サポーターと信頼関係をつなぐ難しさも感じた年でした。

「武蔵野市水のほそみち紀行」発行

サポーター自主活動が活発になる

水の学校

のあゆみ

「水の学校」は、水循環全体を広くとらえ、市民と楽しく学び共に考えていこうという挑戦から始まりました。外部委託先から市職員中心の企画運営へと移行し、講座を修了したサポーターの関わりも深まってきています。開始から5か年の間の主な出来事です。



2017年度

4月に事務局が武蔵野市環境部下水道課管理係から水循環推進係へ移りました。送り手の育成を意識し、サポーター向けにプロジェクトWETエデュケーター講習会を実施しました(P28参照)。サポーターについてはニュースレターの原稿作成や自主活動の活発化など活躍する場面が増える中、職員から見ると「負担が重すぎないか」「能力が存分に活かされるか」の間で気を揉むこともありました。

下水道展'17 東京出展!

「武蔵野市にくる水・ゆく水」発行



「水循環シンポジウム2018 優秀賞」受賞

2018年度

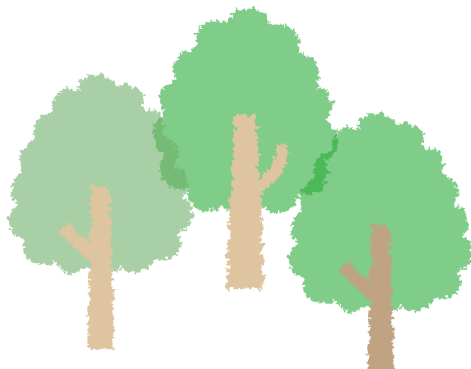
5年目を迎え、連続講座を実施する一方で今後を見据えた事業展開の模索を行いました。サポーター企画のステップアップ講座では、バスを利用した施設見学、暑い時期の座学&デモンストレーション、外部講師を招聘してのまちあるき&ワークショップと、多様な形態で実施しました。また、講座内でサポーターが前に出て説明する場面も多くなりました。かつて受講生だった方が知識を深め、発信する流れができています。

サポーターが 講師役となる 講座が増える

「水の学校5年間のあゆみ」発行

2019年度～

これまでの5年間で、参加者が学ぶことに加えてその後の担い手となる仕組みづくりを行い、市民や職員の能力育成やコミュニティ形成を行ってきました。現状では、参加しやすい世代に限りがあるなど一部課題もあるため、より参加しやすい仕組みを構築し、引き続き市民の力を生かした事業を行えるよう工夫をしながら事業を継続します。



4月

今年度のパンフレットを作成し、納品後の市内施設・団体への送付計画を立てる。他部署と連携して、無作為抽出で参加者を募る際の抽出条件の選定（情報管理課）、郵送ハガキの手続き（総務課）、CATVやラジオでの周知の段取り（秘書広報課）を行う。市報掲載記事の作成、サポーターへの情報提供などに取り掛かる。

担当の声

4月は各課と調整して準備することが多い。市報原稿の締め切りに注意！

5月

来月の開校式に向けて、具体的な進行や役割分担を決める。各関係者との事前打合せ。また、連続講座の申込が定員に満たない場合や超過した場合の対応。特に無作為抽出のハガキが届いた方から多く問い合わせがくるので想定質問を考えておく。参加者が確定したら当落通知を送付する。それと合わせて、初回講座の案内を開校式の10日程前までには発送できるようにする。

担当の声

準備をする上で、過去の資料が役に立った！

また新たな年度へ

ゴール

3月

今年度の講座の全体を振り返り、改善点を取り入れて、来年度の講座の大まかな概要をまとめる。これらを用いて市長へ来年度の全体の流れを報告し、了承を得る。講座の会場予約や緊急連絡先としての携帯電話の確保など、先行した動きが肝心なものは忘れずに手配を行う。

担当の声

担当職員の異動を想定し、講座全体のまとめ（振り返り）を行うことは大切！

2月

啓発品を作成。サポーターと共に、パネルづくりや、水に関わるスポットの散策マップ作りなど、「水の学校」の活動やこれまでの受講生の声を踏まえて水環境や水循環をより多くの人に知ってもらうためのものを作成する。

1月

新サポーターを迎えての顔合わせのため、ミーティングを行う。来年度の連続講座やステップアップ講座などをサポーターと一緒に考える時期。最終講座で受講生から出たアイデアなどをもとに、今後の講座づくりについて話し合う。

担当の声

新サポーター誕生！市の意見を押しつけず、やりたいことを引き出す工夫をする。

水の学校

事務局のある1年



開校式

6月

第1回講座開催。席は自由席にするべきか、世代・性別・居住地区を考慮し指定席にするべきか、カリキュラムに応じて検討する。初回で「水の学校」の印象が決まるので、ためになる講座はもちろん、受講生に次回もぜひ参加したいと思わせる工夫が必要。子ども向けすぎず難しすぎない講座内容になるよう気をつける。

担当の声

講座後の懇親会を設けることで受講生同士のつながりができ、今後の講座において活発な意見が出やすいという印象を持っている。

7月

第2回講座開催。合わせてステップアップ講座を考える時期。サポーターや受講生とのつながりを深める講座を企画・調整する。サポーターの意見を吸い上げる。

担当の声

屋外の講座では、もしもに備えて救急セットを携帯する。また、各講座の詳細タイムスケジュールは、1つ前の回でお知らせできるように固めておく。

8月

連続講座はお休み。単発講座を行う場合も真夏の屋外講座は控え、屋内での座学にする。10月の講座の準備に入るが、見学場所の下見の際は熱中症に注意する。次年度の予算が大きく変わる場合は、概算要求を行う。

担当の声

百聞は一見にしかず。トイレの場所の確認、時間配分の検討などにおいて下見は大切！

9月

バスで市外へ行き、水のゆくえを知る第3回講座。見学先の担当者と質問が出た場合の対応などを事前に打ち合わせしておく。バスの中でのプログラムも考えておく。

10月

第4回は、まちあるきなどの屋外講座が通例。その後のワークショップを通して、新たな気づきや知識を得てもらうため、インプットとアウトプットを意識したカリキュラムを作成する。

担当の声

4回目になり、受講生同士の会話も活発に。同じ人ばかりが固まらないようにグルーピングに配慮する。雨が多い季節なので、雨天時のプログラムも事前に見学先と相談して考えておく。

修了式

12月

最終回となる第6回講座。今までの講座で得た知識を、多くの方に伝えるためにはどうしたら良いかアイデアを出し合い、発表してもらう。

担当の声

サポーター登録を促すため、先輩サポーターの生の声を伝えてもらう。交流会も行う。

11月

第5回は市内の地形を知ったり、市の施設見学を行う。下水道課職員が下水道の重要性について直接市民へ伝える機会であり、様々な質問を通して、違った視点から下水を捉えられる。合わせて修了式の準備も行う。修了バッジのデザインを決め、制作に入る。

担当の声

職員も個々に目標設定を行い、スキルアップにつなげる。

